

群 教 ゼ	G11 - 03
	平 15.213 集

児童自ら計画し、実践する喜びを 実感する学級活動

「チャレンジ」活動への取組を通して

特別研修員 倉林 一彦

《研究の概要》

本研究は、自主性に欠ける学級集団の自発性を喚起し、主体的な学級活動を展開させるにはどうしたらよいかについて実践を通して明らかにしたものである。そのために、児童が興味をもって取り組むと思われる活動および学級生活上の問題の解決に関わる活動から三つを選び、「チャレンジ」と称した。「チャレンジ」活動に取り組む過程で、児童が自分たちで計画し、実践する喜びを味わえるよう、話し合いおよび実践活動を行った。

【キーワード：学級活動 自主的、実践的態度 イベント的活動 学級生活上の問題 「チャレンジ」活動】

主題設定の理由

昨今、子供たちは、自分の生活上の問題に気づく感性や、生活を向上させようとする意欲に欠けるといわれている。また、進んで活動を計画し、実践する意欲に乏しく、言われるのを待ってから動く「指示待ち」型の傾向が強いともいわれている。

本学級（3学年）の児童は、男子20名・女子14名、計34名からなる。些細な口論やトラブルは日常的に見られるが、ほとんどが無難に解決を見る程度のものである。男女の仲も比較的良好で、休み時間には性差を越えて、一緒に遊ぶ姿が見受けられる。大きな問題行動に類するものも、今日までほとんど発生していない。このように無難にまとまってはいるが、学級生活上の問題に気づく感性や、活動を計画・実践していく意欲に欠ける面がある。

以上の実態から、本学級の児童には、「学級でのイベント的活動を自分たちで計画し、実践しようとする事」とおよび「学級生活上の問題に気づき、力を合わせて解決しようとする事」の二つに重点を置いて、自主的、実践的態度をはぐくむ試みが必要であると考えた。ここで重要なのは、「話し合い活動で自分たちが決めた事柄を、実践に移すことができる」ということを児童に実感させ、実践後の達成感を味わわせることである。こうして得られた達成感が、次の活動を計画・実践していこうとする新たな意欲の喚起に通じるものと考えた。

本研究では、「児童自ら計画し、実践する喜びを実感する学級活動」を実現するための具体的方策として、「チャレンジ」活動を設定した。「チャレンジ」活動とは、「学級でのイベント的活動の実施」および「学級生活上の問題の解決」という観点から、学級生活の向上に資すると思われる活動三つを選定し、児童主体の活動として計画・実践していこうとするものである。

児童が協力して本活動に取り組み、教師は、児童が満足感、達成感を味わうよう支援を行うことで、児童自ら計画し、実践する喜びを実感させることができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

「学級でのイベント的活動の実施」および「学級生活上の問題の解決」という観点から、

「チャレンジ」活動を選定し、児童が満足感、達成感を味わう場を設定することで、児童自ら計画し、実践する喜びを実感できることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 体育的な内容のイベント的活動である「チャレンジ1」を計画・実践する過程で、運動を得意とする児童の活躍の場を作ると共に、どうしたら苦手とする児童も楽しめるか、児童自ら話し合い、実践することによって、自分たちで計画したことを実践する喜びが実感できるであろう。
- 2 図工的な内容のイベント的活動である「チャレンジ2」を計画・実践する過程で、描画を得意とする児童の活躍の場を作ると共に、どうしたら苦手とする児童も楽しめるか、児童自ら話し合い、実践することによって、自分たちで計画したことを実践する喜びが実感できるであろう。
- 3 学級生活上の問題を解決するという「チャレンジ3」を計画・実践する過程で、「チャレンジ1・2」の経験で培った計画する力・実践する力を生かすことによって、問題の解決に向けて児童自ら計画し、実践する喜びを実感できるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「児童自ら計画し、実践する喜びを実感する」とは

計画委員会を中心とした話し合い活動および実行委員会を中心とした実践活動を通して、児童一人一人が自ら計画し、実践する喜びを実感できるようにすることである。具体的には、次のような点に配慮して指導・援助する。

ア 「児童自ら計画」する過程

- ・ イベント的活動においては、児童一人一人がイベントを選定した後、学級の皆が満足できるよう、工夫する話し合いを指導・援助する。

- ・ 学級生活上の問題の解決においては、問題が意識された後、解決方法について、話し合い活動を行う。「...に気をつける」という心構え論ではなく、具体的方策について児童一人一人が考えられるよう、示唆を与える。

イ 「実践する喜びを実感する」過程

- ・ イベント的活動においては、実践の際生じる計画との齟齬について、適宜支援していく。また、仮に「イベント的活動」が不成功に終わったとしても、「実践する喜び」が味わえるよう、支援や事後指導に留意する。

- ・ 学級生活上の問題の解決においては、児童が楽しめるような要素を採り入れていくと

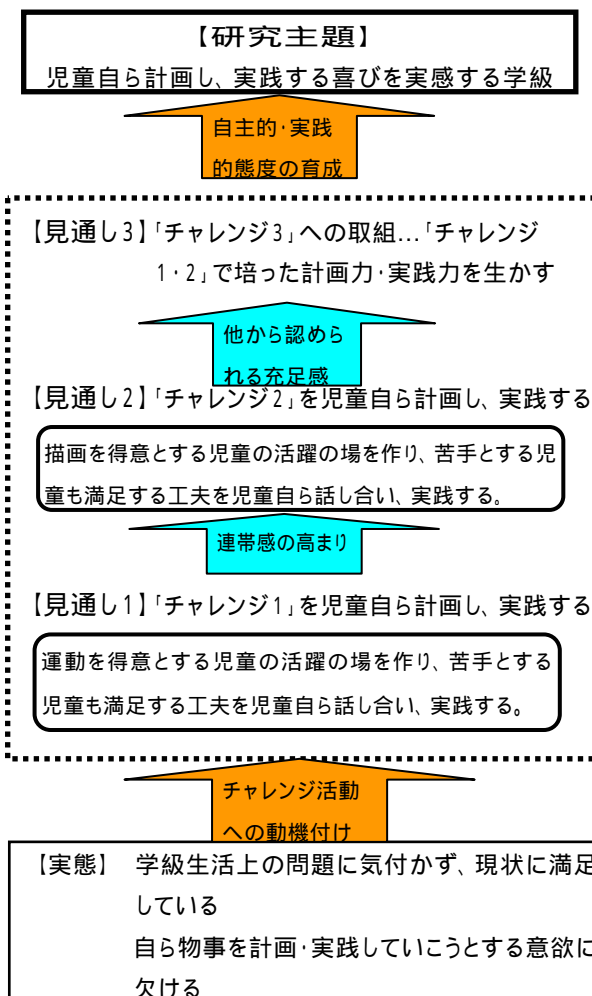


図1 全体構想図

同時に、自分が皆の役に立ち、友だちに認められているという充足感が持てるよう、支援を工夫していく。

(2) 「チャレンジ」活動とは

「学級の連帯感を高めるであろうイベント的活動」および「達成不十分と思われる学級生活上の問題」の中から、三つを選定し、実践に向けて協力していく活動である。選定方法は、アンケート調査を実施し、児童の希望や問題意識を吸い上げると同時に、教師の意図も加味する。こうして、選定された「チャレンジ」活動は、以下の三つとなった。

「チャレンジ」の個々の内容に

ついての期待度を調査したところ、

人気が集まったのは、チャレンジ1

「ドッジボール大会盛り上げ作戦」

(44%)とチャレンジ2「教室かざり

つけ作戦」(41%)であった。チャレンジ3「進んでやろう係活動作戦」は、学級生活上の問題の解決という性格のためか、あまり支持されなかった(15%)。

本来、チャレンジ3「進んでやろう係活動作戦」は、時期的には、9月に扱うべき内容である。9月当初、1学期の係活動を反省し、指示待ち的な部分が多かった点を自覚させ、係活動を活性化させようとしたが、よい改善策は出なかった。ここで、児童に、自らの自発的な力を自覚させ、互いのよいところに眼を向けさせることで、学級の連帯感を強め、学級生活上の問題解決に対する意識を高めたいと考えた。そのために、まず、「イベント的活動」を立ち上げ、全員が協力して活動に取り組む経験が必要であると考えた。

そこで、3つの「チャレンジ」の配列については、前半に「イベント的活動」を配し、最後に「学級生活上の問題の解決」を配した。「チャレンジ1」においては、体育的色彩の強いものを、「チャレンジ2」においては、図工的色彩の強いものを扱った。この2つのチャレンジ活動の実践を経て、児童の計画する力や実践する力を次第に高め、最後の「チャレンジ3」に帰結することを企図した。つまり、「チャレンジ1・2」において、得手不得手に関係なく、皆が満足できるような工夫をすることによって、学級の連帯感を高め、最後の「チャレンジ3」の実践へと至る過程で、児童の自主的・実践的態度が育成されることをねらいとした。

チャレンジ1 = 「ドッジボール大会盛り上げ作戦」 チャレンジ2 = 「教室かざりつけ作戦」 チャレンジ3 = 「進んでやろう係活動作戦」

2 実践の概要及び結果の考察

本研究では、学級集団の変容に加え、抽出児A子の活動の様子や感想に着目して、個の変容についても検証を進めていく。A子は、学習態度はまじめだが、生活面では積極的とは言えず、自分から進んで意思表示をしないタイプの児童である。

(1) 体育的な内容のイベント的活動である「チャレンジ1」への取組において、運動を得意とする児童も苦手とする児童も満足感を得る工夫について児童自ら話し合い、実践することによって、自分たちで計画したことを実践する喜びを実感することができたか。【見通し1】

ア 実践の概要

「苦手な子も楽しめるルールを工夫し、全員が満足できるドッジボール大会にしよう」というめあてで話し合い活動を行った。全員が楽しめる工夫やチーム編成の仕方、試合方式などについて決めた。チームの勝敗を競うほかに、個人賞を設け、表彰を行う、という案も採択された。トーナメント戦で3回試合を行った後、児童は「ふり返りカード」を使って、自己評価および相互評価を行った。

イ 結果と考察

「全員が楽しめる工夫」としては、「あまり投げていない人に、ボールをゆずる」「苦手な

人は、2回当たったらアウト」などの案が出された。チーム編成の段階では、くじ引きやじゃんけんは児童自身によって却下され、互選により公平なチーム分けが行われ、チーム名も決められた。

教師は、チーム数、人数や男女比などについて助言したが、大筋は児童自ら決めることができた。しかし、試合時間（前半3分・後半3分）や試合形式（トーナメント戦で全3回戦実施）・結果の集計方法（3回戦それぞれの順位を1位＝4点...のように素点化し、最後に合計する）などについては、児童の発案に任せるのは無理と判断したため、教師が提案した。

また、個人賞という発想も容易に出なかったため、教師の支援により児童のアイデアを引き出した。その結果、最も活躍した「ベストプレイヤー賞」・苦手であるが頑張った「がんばり賞」・親切な行為に対する「思いやり賞」の三つが採択された。

全3回戦の通算の結果は、「表1」の通りである。スターコアラーズのリーダーの感想として、「2回戦までは合計点が1番高か

表1 全3回戦の結果の素点化及び総合順位

	1回戦	2回戦	3回戦	合計点	順位
菰川タコちゃんズ	4点	2点	4点	10点	1位
スターパワーズ	2点	2点	3点	7点	3位
ビタミンCズ	1点	3点	1点	5点	4位
スターコアラーズ	3点	4点	2点	9点	2位

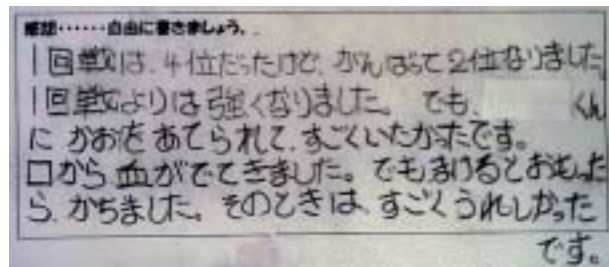
ったので、優勝するかと思っただけで、全体の結果では2位になったのが残念だった。でも満足です」とあった。この児童も含め、ドッジボールの得意な児童（8名）は全員、試合結果に満足との感想を書いており、活躍の場が作られた

と考える。得意な児童の中の2名は、大多数の児童の評価を得、「ベストプレイヤー賞」を受賞した。また、大会全体を通じて、1人の児童がボールを独占するような自分本位な行動が減り、ボールをゆずり合う光景がしばしば見られた。親切な行為が始めから終わりまで見られた2人の児童は、「思いやり賞」を受賞した。

児童の感想を見ると、「今までにやったドッジボールとくらべて、いちばんおもしろかったです」のように、従来の体育の時間でのドッジボールとの比較が多く見られた。児童自らルールや公平なチーム分けについて意見を出し合い、事前の話合い活動に力を注いだという自覚が、これらの表現に表れたと考える。また、「自分のボールが高くなったように（＝投げ上げられた）気がします」「すすんでとれたような気がしました」という感想から、苦手だった児童が積極的にボールに触れたことにより、自己の前向きな変化に喜びを感じている様子が読み取れる。この児童は、多くの児童の推薦により、「がんばり賞」を受賞した。

A子は、今まで、ドッジボールには消極的で、コート隅で砂に絵を描いていることもあったが、「チャレンジ1」においては、前向きな姿勢が見られた（資料1参照）。進んで試合に参加していった様子や、チーム全体が、前回よりも順位を上げたことに対する喜びが見て取れる。話合い活動を経て、自分たちが決めたチームであるという

資料1 チャレンジ1についてのA子の感想



自覚と、戦い方についても、作戦会議という形でチーム内で話し合ったという経過が、チームメイトに対する仲間意識を育て、この感想に表れたと考える。

大会全体の満足度についての、評価用紙の計3回の集計結果は、「図2」の通りである。

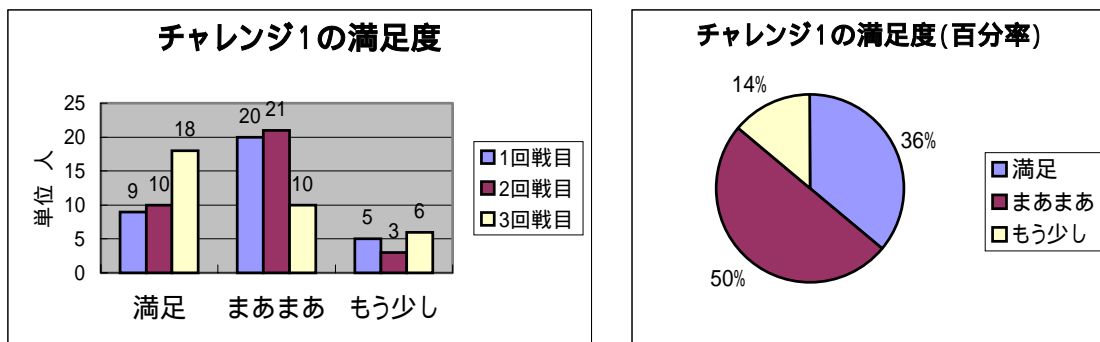


図2 チャレンジ1の満足度

全体としては、「まあまあ」が「満足」を14ポイント上回っている（図2・右グラフ参照）。それぞれの項目の人数に着目すると、「まあまあ」が、1回戦後から2回戦後へとほぼ同数だったのが、3回戦後に減少に転じている。これに対し、「満足」は、3回戦後に最も高い数値を示している（図2・左グラフ参照）。これらのことから、回数を追うに従い、大会全体に満足した児童が増えていったことが分かる。しかし、「まあまあ」が最高ポイントを有しており、学級全員が満足感を得たとは言えない。この点を踏まえ、改善点を考慮しながら、「チャレンジ2」の計画・実践に入った。

- (2) 図工的な内容のイベント的活動である「チャレンジ2」への取組において、描画を得意とする児童も苦手とする児童も満足できる工夫について児童自ら話し合い、実践に移すことによって、自分たちで計画したことを実践する喜びを実感することができたか。【見通し2】
- ア 実践の概要

「教室の雰囲気をもっと楽しくするために、室内の掲示を工夫しよう」という目当てで話し合い活動を行った。「色紙などを使って、教室の飾り付けをする」「グループごとに、テーマを決めて合同制作を行う」「優秀作品を表彰し、個人賞も出す」などの案が採択された。グループで決めたテーマに従って、色紙などを用いて小物を作り、全体のレイアウトを決めた。その後に模造紙の上に貼り付け、グループ毎にコラージュ的な合同作品を作った。最後に、全員で相互審査を行い、優秀作品及び個人賞の決定を行った。

イ 結果と考察

当初の話し合いで、議題を受けて「どんな方法があるか」と問うと、「大きな紙にみんなの作品をかざる」「個人写真や、集合写真などをかざる」「動物の絵をかく」「森の絵をかく」のように意見が多岐にわたった。問いがあいまいであったために生じた混乱で、「飾る方法・飾るもの・テーマ」のように意見の内容が拡散したのである。教師の指導により、意見に方向性を持たせた。

グループのメンバーについては、チャレンジ1で仲間意識が育ちつつあったので、そのグループ構成を生かし、グループ名のみ改めることになった。各グループのテーマは、自然ワールド...「森と海」、お絵かきブック...「昆虫」、フルーツビートル...「果物と昆虫」、アニマルスケッチ...「動物」の四つに決まった。作品は図工との合科という扱いで制作した。終了後の相互審査の結果は下記の通りである。

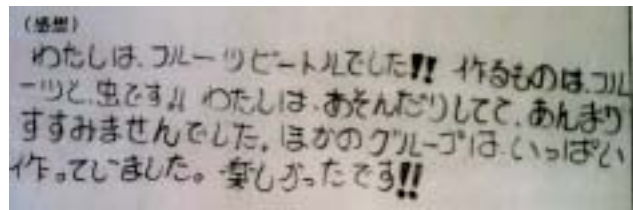
・自然ワールド...7票・お絵かきブック...12票・フルーツビートル...6票・アニマルスケッチ...9票

お絵かきブックは、チャレンジ1では3位だったが、今回は1位となり、グループの特長が生かされる結果となった。個人賞としては、ベストペインター賞に描画の得意なB男とC子が選ばれ、特にC子のグループは優秀賞だったため、とても喜んでいて、この2名を含め、

描画の得意な児童（9名）は全員、活動の結果に満足との感想を書いており、活躍の場が作られたと考える。

A子は、自分の制作態度を反省しながらも、他のグループの良さを認め、評価する感想を書いていた（資料2参照）。自分のグループのメンバーだけでなく、他のグループの活動ぶりへと視野が少し広がった様子が見て取れる。

資料2 チャレンジ2についてのA子の感想



チャレンジ2の満足度を調査したところ、「図3」のようになった。

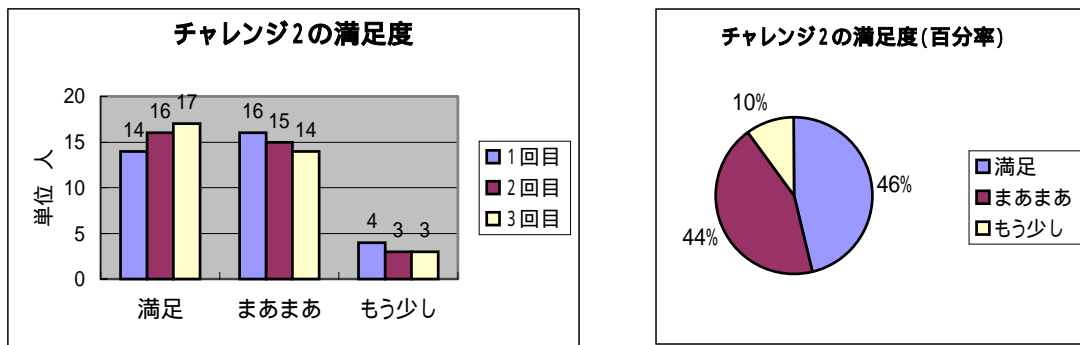


図3 チャレンジ2の満足度

人数の推移を見ると、「満足」は回数を追うごとに増加し、「まあまあ」は逆に減少している。また、「もう少し」は常に低い数値を示している（図3・左グラフ参照）。最終的なポイントは「満足」が最高値を取った（図3・右グラフ参照）。チャレンジ1に比べ、「満足」のポイント数が上がったのは、チャレンジ2が同1のように、はっきりと勝敗が決まる性格のものではなく、活動そのものを楽しめたことに起因すると考える。「みんなでいっしょに相談して作って、場所を決めてはったりするのが楽しかったです」という児童の感想からも、このことが読み取れる。描画が苦手な児童の中にも、たくさん小物を作った児童に贈られる「工作賞」を受賞し（3名）、喜ぶ姿が見られた。このことから、苦手な児童も楽しく活動し、友だちから評価される場を得たと言える。

しかし、「満足」が「まあまあ」を2ポイント上回るにとどまったのは、合同制作という形態を採ったことが、連帯感をはぐくむためによかった反面、些細な口論を生む原因になったことが挙げられる。「D君が、そこにはらないでとか、もんくを言ってきたのがいやだった」などの感想が見られたことから、これが読み取れる。友だちのよさを見出し、自分が友だちに役立っているという意識をはぐくむことが、チャレンジ3の重要なポイントとなる。この点に留意して、チャレンジ3の計画・実践に入った。

- (3) 学級生活上の問題を解決するという「チャレンジ3」に取り組む過程で、児童は、「チャレンジ1・2」の経験で培った計画する力や実践する力を生かし、問題の解決に向けて自ら計画し、実践する喜びを実感できたか。【見通し3】

ア 実践の概要

「2学期の係活動を振り返り、自分たちが進んで取り組む係活動について考えよう」という議題で話し合った。2学期の係活動の反省点を出し合った後、「係活動強化週間」を設けることを決め、自主的な係活動への試みを行った。具体的な方法としては、係ポスターを描き、

毎日の活動結果を相互評価し、「ごくろうさまカード」を他の係の児童と交換した。その結果を1週間蓄積し、自らの係活動の反省材料とする、などが採択された。「係活動強化週間」後、児童は、友だちの活動のよいところを探す楽しさや、自分の活動を友だちから認められる喜びを感じ、これを3学期の係活動に生かすことを確認した。

イ 結果と考察

2学期の係活動の反省点として、「あまり活動しなかった」「言われるまで動けなかった」「仕事をし忘れた」などが挙げられた。意識付けをはっきりさせるために、「係活動強化週間」を設定し、各係ごとに活動内容を考えさせた。達成の基準は、「友だちがどれだけ満足したか」に置くこととした。頑張っ活動した子に対して、「ごくろうさまカード」を送り、それを係のファイルに1週間分蓄積し、どの係がより多くの満足感を学級の友達に贈れたかを評価した。蓄積した結果を見ることにより、係全体の得票数に加え、その係の中で、誰が特に評価されたのかも明らかになる。

「ごくろうさまカード」の集計結果は、「表2」の通りである。上位三つの係を表彰することとし、各係の中の最高得票者は、優良活動者として個人賞を贈られた。

「係活動強化週間」を振り返って、「友だちにカードを贈ったり、もらったりするのが楽しかった」「ちょっとゲームみたいで、係活動に今までより楽しく取り組めた」という感想が多く見られた。「ごくろうさまカード」という具体的な方法を試みたことで、児童が興味を持って活動できたことがうかがえる。また、「いろいろな子からごくろうさまカードをもらいました。だから私もみんなにいっぱいおくりました」「あまり仕事がなかったのに、みんなが14ポイントもくれた。ありがとうございました」などの感想も見られた。「ごくろうさまカード」が、友だちに満足感を贈ったことへのお返しであるという趣旨が理解されたものと考えられる。

A子は、感想欄に、1学期の係活動の反省や、チャレンジ3の係活動では、自分から仕事を探そうとしたことなどを書いている(資料3参照)。係の仕事について自主的に考えようとする姿勢は、前向きな変容と受け取れる。

表2 係活動週間の集計結果(単位 枚)

連絡係...60	学級代表...54	宿題係...51
保健係...50	配り係...49	黒板係...47
整とん係...45	体育係...38	電気係...31
本係...17	花・生き物係...14	

資料3 チャレンジ3についてのA子の感想

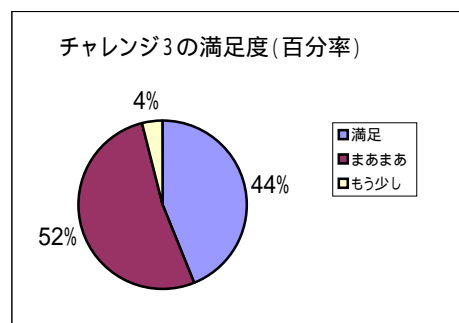
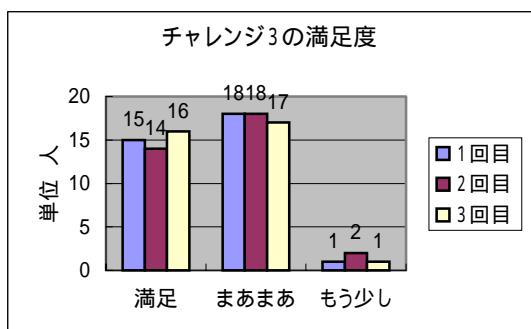
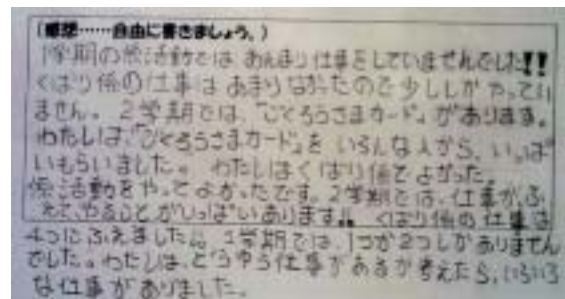


図4 チャレンジ3の満足度

チャレンジ3の満足度は、「図4」の通りである。人数の推移を見ると、全3回の意識調査を通じて、「まあまあ」が常に最も多いが、「満足」は第3回の調査で一番高い数値を示している（図4・左グラフ参照）。「もう少し」は、常に低い数値を示しているが、これはカードのやり取りという活動の新鮮さが、興味・関心の持続という効果として表れたものと考えられる。満足度の集計結果は、最終的には、「まあまあ」が「満足」を8ポイント上回った（図4・右グラフ参照）。しかし、「満足」「まあまあ」を合わせた学級の9割が、チャレンジ3の係活動を肯定的に評価しているということは、自分たちの自主的な取組に、従来の係活動とは異なるものを認めたことによると考える。つまり、従来の係活動では、「係の仕事をして誰も見ていてくれない。やらなければならないことだ」として、義務感をもって仕事を行うという実態があり、そこには、自主的な係活動が生まれる余地がなかった。チャレンジ3の係活動では、仕事を自分で見つけ、進んで仕事を行う様子を、友だちが肯定的に評価してくれ、「ごくろうさまカード」という形で自分に贈ってくれる。自分も友だちの活動ぶりに注目し、よいところを見つければカードを贈り、そのことをさらに相手から感謝される。こうした心のやりとりが、「友だちの役に立つ喜び」という動機づけとなって、チャレンジ3に前向きに取り組ませ、自分たちの自主的な活動を肯定的に評価する結果を生んだと考える。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

「チャレンジ」活動全体を振り返って、児童は、「楽しかった」「(似たような形で)またやってみよう」という感想を書いていた。「チャレンジ1・2」は同じグループ構成で活動し、児童は、完全とは言えないまでも、「話し合い活動で自分たちが決めた事柄を、実践に移すことができる」ということを経験した。また、実践活動の事中・事後において、友だちの活動のよいところを探そうとする見方を養い、自分の活動を友だちから肯定的に評価される喜びを知った。「チャレンジ3」では、それまでのグループを解体し、従来の係のメンバー構成に戻ったわけだが、「他の係に対する評価」という活動内容のため、学級のメンバー全員が交流し合う結果となった。「イベント的活動」から「学級生活上の問題解決」へと内容が変わったにも関わらず、児童は前向きに取り組んだ。「チャレ3はむずかしかったです。でも、ごくろうさまカードを作ってから、がんばれるようになりました」「ぜんぶのチャレンジで、一番よかったのはチャレ3です」という感想も見られた。「チャレンジ1・2」で培われた計画し、実践する力や、友だちとの連帯感、友だちから認められる充足感が、「チャレンジ3」への自主的な取組となって表れたと考える。以上のことから、「チャレンジ」の活動を通して、児童は、本研究の主題である「児童自ら計画し、実践する喜びを実感する学級活動」を経験することができたと考えられる。また、三つのチャレンジ活動を経験する過程で、児童自身による話し合い活動のスキルも、わずかながら向上した。学級内の決め事の問題解決がすみやかになったことや、他教科の討論型の授業において、挙手や相互指名が活性化し、発言内容に深まりが見られたことなどにも、その成果が波及した一面が認められた。

2 今後の課題

「チャレンジ」活動は全体として規模が大きく、年間指導計画との関連では、時間設定に苦慮した。体育や図工との合科として扱ったり、朝の会・帰りの会の時間を使ったりするなど、相当の時数を要した。活動全体を通じて、児童に多くを任せる部分と、教師の支援が必要となる部分とをより明確にすることによって、内容の質的向上を図るとともに、内容の量的改善、つまり活動全体のスリム化を図ることが、今後の課題である。

<参考文献>

- ・宇留田 敬一 編 『学級生活問題の議題化 小学校中学年』 明治図書（1991）
- ・宮川 八岐 編・著 『新学習指導要領を生かした特別活動の授業』小学館（2001）